



(題簽) 『舌切雀』 山本重春画 黒本』



実践女子大学図書館  
1A0119696

むかしむかしさるいなかに もゝの  
弥五太夫といふものありけり

じひふかく せうしき

なりしか あるとき子供あつまり

すゝめを一羽

とらへ うちころさんとするところへ

弥五太夫とをりあわせ

子供にせにをとらせ

すゝめをもらいて

わかやにかへる

(弥五太夫) みんなにぜひをやるうぞ

よい子じや そのすゝめを

おれにうつてくれい

(子供) いのすけ うつてやろうか

(雀) ちうちうちう



弥五太夫すゝめをかいとり うちへもどり

むすめおむめによるこぼする

おむめすゝめを かはいかりけり

むすめうれしがる

(弥五太夫) 百でかい申た

けんとんはゝはらたてる

(慳食婆) あんにすべい もし つんにがさつしやい

山本七郎重春之書

あるとき じゝのるすに ぼゞせんたくするとて のりをにて

さましをきけるに かのすゞめかごより出て のりをすこしなめけ

れば けんどんぼゞ大ぶんはらたち すゝめのしたをきつてはなし

ける事

はなはだじやけんのいたり なさけなき事也

(お梅) かはいそくに

(慳食婆) てさてきて につくいすゝめだ いそがしいに

せつかくにたのりを みんなにした うそはらのつゝたつ

(舌切雀) ちうちうちう



弥五太夫すゝめをふびんにおもひ おむめがてをひき  
たつねに出る所

をやすゝめ弥五太夫が心をかんじ すげのまつばらまでむかいに出  
礼をいふてともない行 大ぶんちそうする

(お梅) したきれすゝめ ちよつちよつちよつ

(弥五太夫) したきれすゝめ ちよつちよつちよつ

すゝめのかくれざと 門がまへ

(雀の家来衆) よふこそおいでなさいました さアさア おとをり  
なされ

(弥五太夫) き様はけらいしゆか

(お梅) しらかべづくりのすゝめどのゝ所はこゝかへ  
はやくすゝめとのに あいとうござる

(長七) お梅様 すゝめとのにあいますぞ さてさて けつかうな  
門がまへかな  
あゝくたひれた



(弥五太夫) こなたのしたは なをりましたか

(舌切雀) 御じい様 御ちそうにげいしやを申付ました  
お梅様 よふ御らんあそばしませ

むすめをもしろがる

(お梅) 長七おもしろいの ちとほめやれ

(長七) いよいよ をらかをらか すゝめのこをどり  
てうづめてうづめ

(唄) いりあいのかねに はなや

ちるらん はなやちるらん

いやつあいやつあ

すつとんすつとん

山本重春筆



すゝめのかくれざと □めの□をかり

すゝめのけらいども すこしのうちも 弥五太夫になじみて  
のこりをがり みなみないとまごいする

(雀芸者) おさらばよ

弥五太夫かりそめにすゝめのもとへ

たづねきたりて ゆるゆるちそうにあひ

みやけにつゞらをもらいてかへる所

ばゞ様へもみやげせんとて

をもきつゞらをでつち長七に

しよわせてかへし

すゝめなごりをしむ

(舌切雀) 御じい様 お梅様 をなごりをしや

(お梅) おさらばよおさらばよ

(長七) だんな わたしがしよつたつゞらは 大ぶんおもふござり  
ます

(弥五太夫) さてさて ちよつときて 久々とうりうして いかい  
ぞうさになりました ぶんもあらば そのうちあいませふ さらば  
さらば

かゝさまが まつてござらふに はやくまいりませう  
此つゞらは大ぶんかるいぞかるいぞ



正しきじゝ内へかへりて

すゝめにもらいし かるきつゝらをあけみれば 金銀たくさんに  
いろいろけつかうなる物いでゝ

一生何にくらからす 急いぐわをしそんにつたへけり

(弥五太夫) うれしやうれしや めでたいぞ

けんどんばゝどうよくものなれば かの

をもきつゝらのふたをあけければ

をそろしきばけいでゝ

ばゝにくいつく

(化け物) ばゝめ したをぬくぞ

(慳食婆) こりやなんとする

(翻字 松原哲子)

